日本古典全書

宇津保物語 五

日本古典全書第八十一回配本
「宇津保物語」五 © 宮田和一郎校註
昭和三十二年三月二十日初版發行
印刷所　大同印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・小倉市砂津・名古屋市廣小路）
定價　三〇〇圓

目次

凡例……三
各巻にあらはれる人人……六
國讓（下）……六
樓の上（上）……八
樓の上（下）……九
本文……一一
國讓（下）……一一
一　朱雀院中宮、忠雅らを招き、梨壺腹を坊に立てんと謀る、忠雅ら議に與かることを辭す……一一
二　中宮、梨壺腹の皇孫立坊と春宮にすすむ、春宮喜ばず……一八
三　中宮再び兼雅を招きて事をはかる……一九
四　中宮、立坊のことを朱雀院に迫る、朱雀院わざと決せず、中宮怨む……二〇
五　あて宮立坊の噂につきて春宮に不平をもらす……二三
六　朱雀院讓位、今上即位、女御を定む……二三
七　中宮忠雅を招けど參らず……二四
八　あて宮の姉妹らあて宮の祝に集る、立坊の噂、忠雅が后腹の女三宮の聟になるといふ噂……二五
九　所所よりあて宮に祝の消息あり……二九
一〇　中宮忠雅を招けども脚氣と稱して參らず、中宮忠雅の假病を悟る……三一

一一　忠雅、歸宅を六君にすすむれども聞かず……三五
一二　卽位式、忠雅不參、正頼以下昇位、司召……三七
一三　六君なほ歸らず、仲忠女一宮を警戒す……三九
一四　朱雀院の悠悠たる生活、御子たちを招く、仲忠女一宮を參らせず……四〇
一五　中宮文を兼雅に遣して立坊をせまる……四二
一六　梨壺腹の御子立坊の噂、正頼あて宮の失望……四四
一七　仲忠女一宮に辨解す、仲忠仲頼を水尾に訪はんとす……四五
一八　仲忠ら仲頼を訪ふ……四八
一九　仲頼の歡迎、詠歌、管絃……四九
二〇　作文、披講、詠歌……五二
二一　人人より仲頼に贈物あり……五四
二二　仲忠、仲頼の子どもを世話せんことを約して歸る……五五
二三　仲忠朱雀院に水尾の有樣を奏し詩を御覽に入る……五九
二四　仲頼涼の贈りし粥の料などを妻につかはす……六〇
二五　藤英時めく、妻十四の君をさとす……六二
二六　立坊の期せまる、正頼失望す……六四
二七　立坊の日忠雅召さる……六五
二八　忠雅密書を正頼に贈る、あて宮腹の皇子立坊の吉報、一家の喜び……六六
二九　兼雅仲忠らの有樣、實忠と仁壽殿との文の贈答……六八
三〇　立坊の宣旨、坊職員任命さる……七〇
三一　后宮、仁壽殿の時めくを怒る、出家の望……七二
三二　六君夫忠雅のもとに歸りて睦まじ……七三
三三　嵯峨大后落膽せらる……七五
三四　梨壺腹の御子とあて宮腹の御子と親王になる……七六
三五　今上、御文を遣はしてあて宮の歸りをうながさる……七七
三六　仲忠あて宮の方へまゐる、春宮參内せんとす……七九

三七　あて宮、袖君の入内を實忠にすすむ、實正賛成す……八一
三八　春宮あて宮參内す、その行列……八四
三九　仲頼の妻とその母行列を見る……八七
四〇　今上、あて宮とその腹の皇子たちを愛さる、登華殿妊娠……八八
四一　新年、宮内卿忠保修理頭に任ず、滋野眞菅父子赦免召還、女四宮皇子誕生……九二
四二　仲忠母俊蔭女を訪ふ、女二宮の噂……九六
四三　正頼、女二宮らを自邸に迎ふ、祐澄ら女二宮を途中に奪はんとす……九八
四四　五宮文を彈正宮に託して女二宮に贈る……一〇一
四五　女一宮の安産の祈禱、その混雑に紛れて人人女二宮を盗まんとす……一〇四
四六　女一宮の難産に仲忠心痛甚だし、男子誕生、産養……一〇七
四七　女一宮のお産の混雑に祐澄が女二宮の乳母を語らひて女二宮を盗まんとせし噂……一一二
四八　峨嵯院の花の宴、詩歌の會に仲忠講師をつとむ……一一四
四九　峨嵯大后、今上の女四宮に冷淡なるを怨む……一二四

樓の上（上）……一二八

一　兼雅一條殿西對に書きおきし宰相上の歌を見てその行方を尋ねんとす、俊蔭女これを仲忠にはかる……一二六
二　仲忠石作寺にこもり、宰相上とその子にめぐりあふ……一二九
三　仲忠宰相上にあひしよしを兼雅に語り文を贈らしむ……一三四
四　仲忠宰相上を訪ふ……一三八
五　仲忠兼雅にみづから宰相上を迎へんことをすすむ……一四二
六　兼雅宰相上を三條に迎ふ……一四四
七　小弓の日人人音樂、小君、父兼雅に親

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しまず仲忠を慕ふ……一四七
八　兼雅梅壺を三條に迎ふ、妻妾たち俊蔭女を嫉妬す……一四九
九　俊蔭女の心くばり……一五〇
一〇　仲忠小君を伴なひて參内す、春宮小君をつれてあて宮方へゆく……一五三
一一　俊蔭女大貳の贈物を人人に分ち與ふ……一五五
一二　仲忠犬宮に琴を教へんことを女一宮に相談す、母俊蔭女にそのことを語る、兼雅來あはせて過去を追懷す……一五六
一三　犬宮の美しさ、仲忠の鍾愛……一六三
一四　仲忠犬宮に琴を教ふべき樓を京極に造る……一六四
一五　仲忠の造れる樓につきて人人噂す……一六六
一六　樓のありさま……一六七
一七　仲忠朱雀院にまゐる……一六九
一八　仲忠嵯峨院にまゐる……一七〇
一九　仲忠犬宮に樓の上にて琴を習はす旨を告ぐ……一七四
二〇　涼仲忠を訪ひ、犬宮を隙見す……一七六
二一　涼妻の今宮に犬宮の美しきことを語る……一八一
二二　仲忠、犬宮の修行中は誰にもあはさぬ旨を女一宮に告ぐ……一八二
二三　犬宮の京極にうつる日の用意……一八六
二四　犬宮京極に移る、その行列のさま、物見の人人……一八八
二五　京極に到着、饗宴、かづけ物……一九一
二六　樓の上の美しき有様……一九三
二七　朱雀院より女一宮と俊蔭女に御贈物と御文あり……一九五
二八　仲忠、母俊蔭女及び犬宮と京極にこもる、兼雅京極を訪ふ、兼雅俊蔭女懷舊……一九八

樓の上（下）……二〇二

一　犬宮樓上に琴を習ふ……二〇二
二　女一宮侍從の乳母に犬宮の樣子を問ふ、乳母の返事……二〇四
三　犬宮への手あつき奉仕……二〇六

四　犬宮母女一宮を慕ふ、仲忠犬宮を慰む……二〇七
五　あて宮、犬宮春宮などのことを父正頼と噂す……二〇八
六　涼樓前を通りて仲忠に歌を贈る、返歌……二一一
七　仲忠、朱雀院・女一宮・兼雅を訪ふ……二一三
八　犬宮、母女一宮を慕ふ、仲忠俊蔭女犬宮を慰む……二一四
九　仲忠俊蔭女昔を懐ふ、俊蔭女父の菩提を弔はんとす……二一五
〇　仲忠と女一宮、兼雅と俊蔭女との間柄……二一八
一　犬宮の侍女たち、雪山を作りて犬宮を慰む……二一九
二　仲忠涼を訪ひてそのむすめを見る……二二一
三　年末に仲忠節料をところどころにわかち贈る……二二七
四　新年……二二八
五　樓上の二月・三月・四月・五月……二三〇
六　六月の祓、俊蔭女梨壺皇子を見る……二三二
七　七夕に仲忠俊蔭女琴を彈く、涼籬の外にて聞く……二三三
一八　俊蔭女の夢に今日尋ね來る人ある由父の告げあり……二三七
一九　時宗さがのの孫四人をつれて來る、仲忠喜び迎ふ……二三八
二〇　仲忠時宗に物賜ひ、四人の子らをいたはる……二四四
二一　仲忠三條邸に歸らんとす、その準備……二四五
二二　涼嵯峨院に參りて、仲忠が樓を下らんとして八月十五日に琴を彈くべきよしを啓す、院それを聞かんと思し召す……二四六
二三　朱雀院以下爭ひてその琴を聞かんと思し召す……二四八
二四　人人前夜より京極にあつまる……二五四
二五　嵯峨院と朱雀院と御幸……二五六
二六　俊蔭女と犬宮樓を下る、輦車の宣旨……二五八
二七　さがのの四人の孫、人人に愛さる……二六二
二八　兩院俊蔭女に琴の祕曲を所望せらる、俊蔭女困惑す……二六四
二九　俊蔭女がりうかく風を彈く聲宮中に聞ゆ、今上信方に琴の聲を尋ねしむ……二七〇

二〇　信方琴の聲をたづねて京極に至る……二七三
二一　俊蔭女犬宮にりうかく風を彈かしむ……二七八
二二　俊蔭に中納言追贈、俊蔭女正二位に敘せらる、さがのの孫四人衞門尉になさる……二八一
二三　兩院以下樓を御覽ず、嵯峨院の懷舊……二八五
二四　兩院還御、仲忠贈物を奉る……二八七

宇津保物語

五

宮田和一郎

凡例

一、本書は宇津保物語の第五分冊である。

一、本書は慶長十五年三月十四日箇庵主道人の奥書ある寫本と、文化の補刻板本・國文大觀本・有朋堂文庫本・日本古典全集本とを參照しつつ、それらのよきに從つて本文を定めたものである。

一、註は本文の語句の右肩に附けた漢數字と照合するやうにした。

一、頭註は、註釋と校異とを混合して施してある。校異は主要なるものにとどめ、いづれにしても誤りなること歴然たるものなどは、これを省略した。

一、頭註は出來るだけ簡略に從つたので意をつくさない點があるかもしれない。しかし、宇津保物語にはまだ纒まつた註釋書がないのであるから、本書は特にその點に鑑み、將來この物語の讀解研究にすこしでも役だつやう力めた。

一、本文を適當に區分して段落を設け、句讀點を施し、漢字をあて、假名遣・送假名を統一して繙讀の便をはかつた。

一、畫詞の部分は、原本では本文中に續けて書いてあつて、一見區別が明瞭でないが、讀んで見ると見當

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

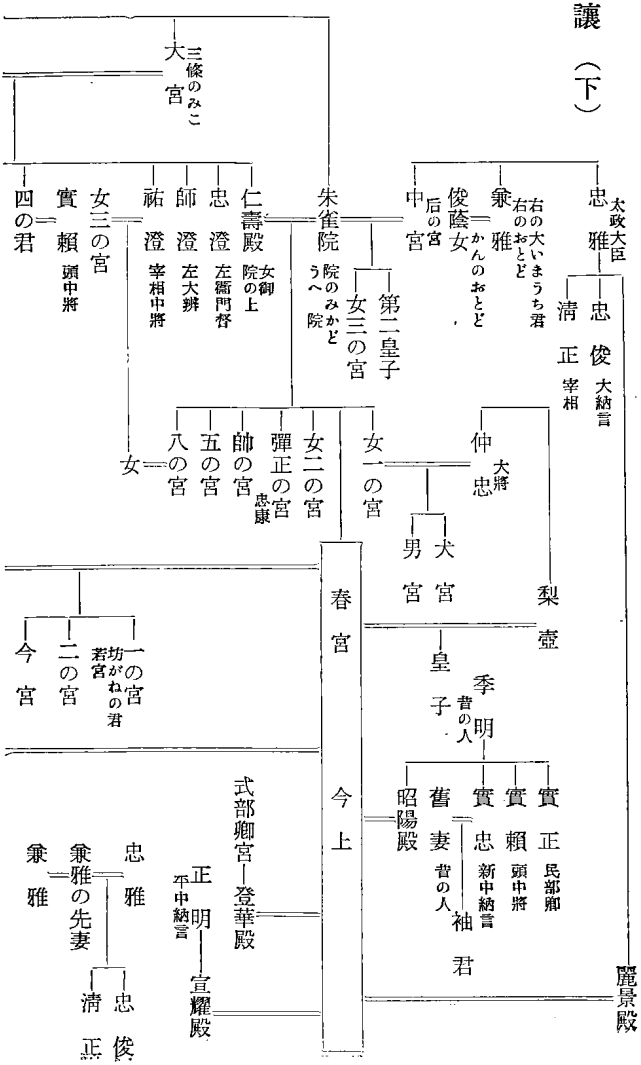
がつくのであるから、【畫詞】として、行を改め、二字下げて本文と區別しておいた。

一、巻の順序は古來異説があつて一定しない。で、試みに年立を作つて檢討して見た結果本書の如くに定めたのである。

一、本書には、國讓（下）・樓の上（上）・樓の上（下）の三巻を收めた。

各巻にあらはれる人人

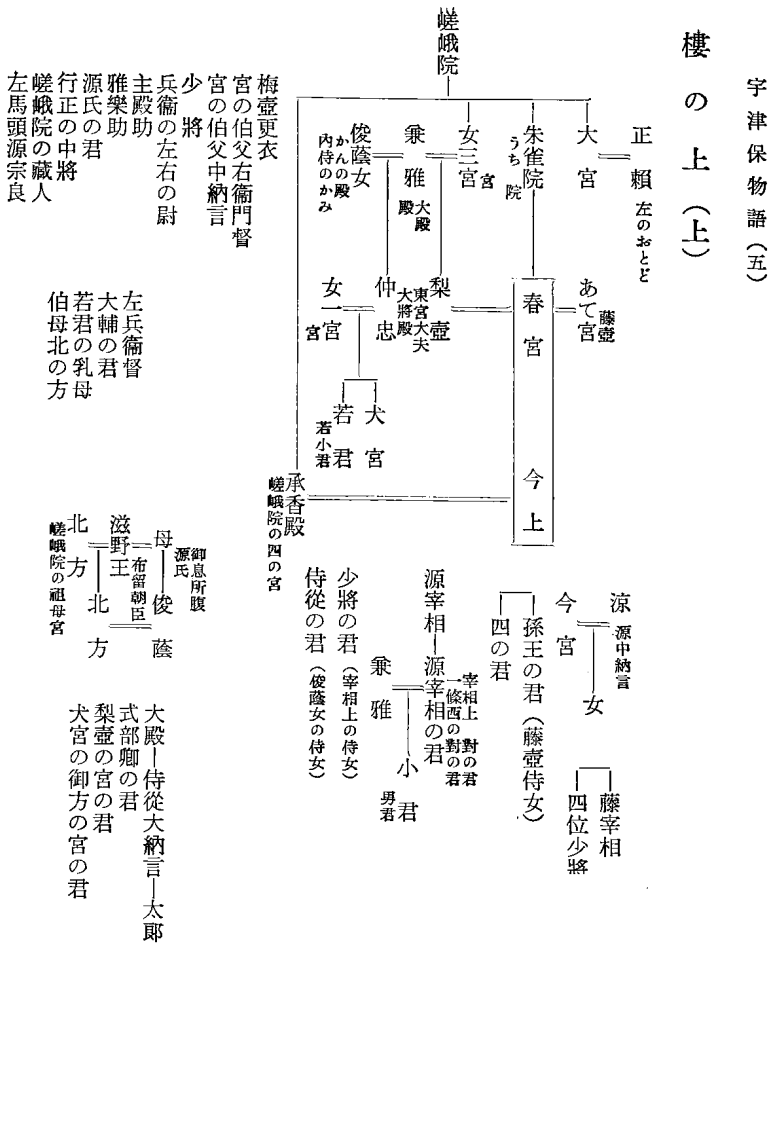
國讓（下）



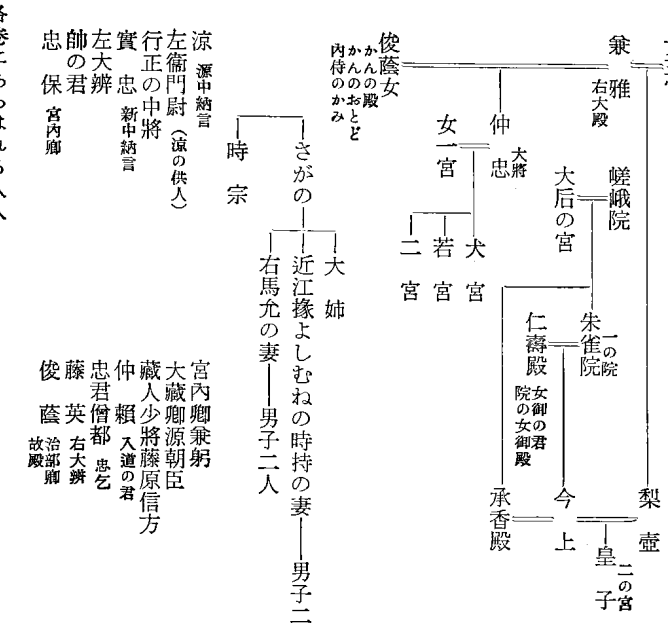
各巻にあらはれる人人

- 嵯峨院
  - 大后の宮（后の宮）
    - 正頼（左の大いまうち君）
      - 民部卿宮
        - 五の君
          - 忠雅
            - 忠俊（藤大納言）
              - 子
              - 子
        - 六の君
          - 子四人
        - 七の君
        - 清正
        - 八の君
          - 子
      - 涼（源中納言）
        - 今宮
        - 藤英（學士の右大辨殿）
        - 十四の君（御匣殿）
          - 實正（民部卿）
      - あて宮（藤壺女御の君）
      - 殿の上
        - 三の君
          - 兵部卿宮
        - 十一の君
          - 顯澄（兵部大輔）
          - 兼澄（右衛門督）
          - 親澄（少將藏人少將）
    - 女四の宮（承香殿）
    - 忠保
      - 女（修理頭）
      - 仲頼（源少將 山伏・山ごもり）
        - 仲頼妹（按察の君）
        - これはた
          - 孫王の君
        - 宰相
          - 宮の權のかみ
        - 母北の方
          - 中將
          - 兵部卿のみこ
          - 東宮亮
          - 常陸の太守のみこ
          - 良少將（行正）
          - 中務の宮
          - 右馬助近正
          - 眞言院の律師（忠乞）
          - 種松
          - 越後の乳母
          - 時蔭
          - 左衛門非違尉時正
          - 松方
          - 木工助なる藏人
          - 兵衛

樓の上（上）


正頼 左のおとど
大宮
あて宮 藤壺
朱雀院 うち院
春宮 今上
嵯峨院
女三宮 宮
兼雅 大殿
俊蔭女 かんの殿 内侍のかみ
梨壺 東宮大夫
仲忠 大將殿
女一宮 宮
若君 若小君
犬宮
承香殿 嵯峨院の四の宮
梅壺更衣
宮の伯父右衛門督
宮の伯父中納言
少將
兵衛の左右の尉
主殿助
雅樂助
源氏の君
行正の中將
嵯峨院の藏人
左馬頭源宗良
左兵衛督
大輔の君
若君の乳母
伯母北の方
御息所腹 源氏
母
俊蔭
滋野王 布留朝臣
北方
北方 嵯峨院の祖母宮
大殿—侍從大納言—太郎
式部卿の君
梨壺の宮の君
犬宮の御方の宮の君
涼 源中納言
今宮
女
藤宰相
四位少將
四の君
孫王の君（藤壺侍女）
源宰相—源宰相の君 宰相上 一條西の對の君 對の君
兼雅
小君 男君
少將の君（宰相上の侍女）
侍從の君（俊蔭女の侍女）

樓の上（下）



涼 源中納言
左衞門尉（涼の供人）
行正の中將
實忠 新中納言
左大辨
帥の君
忠保 宮內卿

宮內卿兼躬
大藏卿源朝臣
藏人少將藤原信方
仲賴 入道の君
忠君僧都 忠乞
藤英 右大辨
俊蔭 治部卿 故殿

各卷にあらはれる人人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.